

令和4年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

「夢・発見・実現」。総合学科高校の特色を活かし、「ドリカム」授業をコアカリキュラムとし、各系列での学習を通して生徒の興味や関心に応じた幅広い知識や技能を習得させるとともに、学校全体での人権教育・生徒支援・生徒指導のうえに、キャリア教育・教科指導等を密接に連携させて、きめ細かい支援・指導を行い、生徒一人ひとりの「進路実現」を具現する。

- 1 将来に夢と希望を持ちながら自己の具体的なキャリアビジョンを設定し、実現に向け粘り強く継続する力を育成する。
- 2 多様な社会の流れや課題の本質を理解し、高い自尊感情を持ちながら変化の時代を生き抜く力を育成する。
- 3 地域との繋がり人との繋がりを大切に、互いに助け合い高めあう関係を築くことのできる力を育成する。
- 4 「日本語指導が必要な帰国生徒・外国人生徒入学者選抜」実施校として、外国にルーツを持つ生徒への適切な支援を行うとともに、多文化共生を推進する。

2 中期的目標

- 1 「夢・発見・実現」より「夢から発見」一夢を見つけて将来に向けた力をつけるキャリア教育を推進する—
 - (1) 「ドリカム」をコアカリキュラムと位置づけ、全ての授業との関連を持たせつつ、自分で考え自分の言葉で表現できる生徒を育成する。
 - ア 3年間を見据えたグループ学習等を通じて主体的に学ぶ意欲を養い、多様な出会いや体験を通じて自分の将来像を描く中で、自尊感情や社会的有用感に富んだ人間性を育成し、生徒に自己実現させる。
 - イ 3年生課題研究において、自分が選んだテーマを研究し、論文にまとめ、プレゼンテーションすることを通じて、視野を広げ伝える力を育みながら、自らの個性・生き方を磨き、自らの進路を切り開く力を育成し、生徒に自己実現させる。
 - ウ 学校外の協力も積極的に導入し、生徒の基礎学力と学習意欲の向上をめざして多様な進路を保証する。大会・コンテスト・検定等に積極的に挑戦し、生涯を通じて学ぶ力を身につけさせ、幅広い進路を確保して、生徒に自己実現させる。
- 2 「夢・発見・実現」より「発見から実現」—総合学科の特色が最も現れる「授業」を大切にする—
 - (1) 生徒の実態等に基づき、基礎学力を定着させるとともに、興味関心・進路希望に応じた教育内容を創造し、生徒の学ぶ力を向上させる。
 - ア 新学習指導要領の導入に合わせ、系列等の選択科目を刷新し、総合学科としてカリキュラムの充実を図り、生徒の学習意欲を向上させる。
 - イ 学び直しや少人数展開授業の実施等により、文章読解の力など基礎学力の定着を支援し、生徒の学習意欲を向上させる。
 - (2) 主体的・対話的で深い学びを実現した授業づくりを進め、生徒の学ぶ力を向上させる。
 - ア ICT—1人1台端末—を活用する授業改善を行い、府教育センターの研修等にも積極的に参加し、授業力を磨いて生徒の学習力を向上させる。
 - イ 「主体的・対話的で深い学び」の推進のため、校内研修や授業見学等を行い、教員全員が相互に実践を共有して生徒の学習力を向上させる。
 - (3) 「総合学科」の特徴を生かし、「総合学科」らしい進路を含めて、進路決定率90%（R01：87%、R02：88%、R03：88%）。
- 3 「夢・発見・実現」に打ち込める学校—安全で安心な学びの場づくり—
 - (1) 生徒一人ひとりをサポートする人権教育・生徒支援・生徒指導の一層の充実を図り、生徒の不安を解消する。
 - ア 保護者・中学校・本校並びに各生徒の地域や外部の専門人材・支援機関等と連携し、包括的で効果的な生徒支援・生徒指導を行う。
 - イ 学校行事や交流活動などの生徒が生き生きと活動できる場を3年間見通した活動の中で提供する。部活動については引き続き重点項目とし、生徒の自尊感情や集団の中での有用感を高め、興味関心のあることに生涯を通じて継続的に取り組む力を育成する。
 - ウ 日本語指導の必要な生徒について、母語指導の充実や進路への取組みを進めるとともに、学校全体で多文化共生の取組みを進展させる。
 - (2) 教職員が学校経営計画のもと志を一つにし、互いに協力し合う中でチームとして機能する職場づくりを推進する。
 - ア 担任だけでなく副担任も含め、情報共有を密にしなが、全ての教職員が適切かつ丁寧な指導できるよう、チームワークを活かし学年団として対応し、生徒が安心して相談できることに努める。
 - イ 校内研修やディスカッションを通して経験の少ない教員のOJTを図り、併せてミドルリーダーの育成を図る。
 - ウ 年齢構成等、教員集団の現状を踏まえたうえで、教職員一人ひとりの意識改革と学校全体のチーム作りを図り「働き方改革」に取り組む。
- 4 「夢・発見・実現」のための連携—「キャリアパスポート」の継承、地域や保幼小中高連携との推進—
 - (1) 絆づくりと活力あるコミュニティの形成により地域とのつながりを充実させる。
 - ア これまで培ってきた幼保小中との連携、地域連携のネットワークを基盤に、地元へ根づいた「開かれた学校」づくりを一層推進する。
 - イ 学校運営協議会及び学校教育自己診断等を活用し、保護者や地域のニーズを反映した学校改善に取り組むとともに、「キャリアパスポート」を引きつぎ、また「豊川教育コミュニティネット」の一員として、中学校や地域とのネットワークを強化し、総合学科高校としての情報を積極発信する。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [令和4年12月実施分]	学校運営協議会からの意見
<p>生徒への設問 29 項目のうち昨年比で向上したものの 20 項目。低下したものの 9 項目。低下したもののうち昨年比で下回るものはなし。以上より、本校の教育活動は引き続き向上していると見える。</p> <p>特に先生は生徒の意見を聞く(+5.8%)、相談に親身(+6.8%)、指導は納得(+8.4%)とコロナ禍の中での支援・指導に注力したことについては一定の成果が出ていると自負する。</p> <p>その一方で進路・奨学金(-4.5%)、事件・災害(-5.3%)、ICT 機材の活用(-3.5%)などには低下がある。コロナ禍での進路傾向・経済状況・危機意識の変化と1人1台端末の「当たり前」化と思われる。奨学金に限らず資金計画についてはより丁寧であることが必要。端末等については活用の習熟向上を心ずる。</p> <p>また生徒と保護者を比較するとき、生徒の数値は向上、保護者では低下という項目がある。楽しい(+6.9と-5.6%)、生徒理解(+5.8と-3.6%)、困りへの対応(+6.8と-3.3・-6.1%)。こどもを心配する親心を考慮しても、保護者への情報提供努力(-4.6%)とあわせて保護対応は課題。働き方改革の中で電話対応時間を限るなど対面・対話を減らし、メールやフォームに置換している影響も確実にある。教員の勤務時間内では連絡が取りにくい場合も多く悩ましい。</p>	<p>第一回(6/15 開催：授業見学) 学校では人間形成が重要。社会に接する前の子どもたちには、高校生ときの自覚が大きく影響するはず。福井高校は子どもが作り上げている学校だと感じる。先生とSSWが福祉の窓口で相談に来た。先生たちが積極的に来てくれる学校は多くない。心強い。近隣にいるので生徒の様子はよくわかる。非常に楽しそうに明るく下校している。顔つきがいい。ただ、長時間勤務による先生方の健康状態が心配。チーム・連携・共通理解がカギ。</p> <p>第二回(11/16 開催：授業見学) 地元との結びつき、また日本語指導・多文化共生のこと。福井高校の意味は人数の多少では測れない。地元との関係が濃いことをさらに深めて欲しい。たとえば中学では「職業体験」を実施している。高校ではそれが「保育実習」などに繋がっていると思うが、そのように体験がバージョンアップするようと思う。いろいろな意味で、入学当初からしんどい生徒もいるはず。そのような生徒には「この学校はあなたを卒業させるつもりだよ」が何より伝わらないといけない。地元には支援の用意もある。どうぞもっと頼ってきてください。高校生と地域の人が自然と交わるような常時の場もできればいいと思う。高校の中にそのような場所を作れないだろうか。</p> <p>第三回(2/8：開催) 学校教育診断で2年生の数字や「先生は悩みや相談に親身」が高い。指導が丁寧で生徒との関係づくりができています。大雪のときの学校の対応も大変よかった。外からではわからなかったが中に入ってわかった良さがある。ドリカム授業の出前など発信力の向上を。</p>

3 本年度の取組内容及び自己評価

府立福井高等学校

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標 [R3年度値]	自己評価
「夢・発見」 キャリア教育の推進	(1)「ドリカム」を全ての学びの中心に ア、グループ学習の実施 イ、課題研究の充実 ウ、各種挑戦の奨励	(1) ア、プロジェクト学習や多様な社会人と出会いを通じて、生徒に進路や生き方について考えさ、自己有用感を向上させる。 イ、従前からのドリカムルーム・LAN教室のフル活用に加えて、1人1台端末を積極活用し、日々の授業を充実させ、中でもドリカム授業・同フェスタ(総合学科発表会)を柱に、自己肯定感を向上させ、ポジティブに生き方を考える取組みを充実させる。 ウ、大会・コンテスト・資格等への挑戦を奨励し、コロナ禍中でも前向きな目標を設定して努力する姿勢を育成する。	(1) ア、自己診断アンケートの進路・生き方についての肯定的回答：90% [90%]。 イ、総合学科卒業生アンケートの「ドリカム」関係の肯定的回答：80% [77%]。 ウ、競技団体や認定団体等主催の大会・コンテスト・資格等に挑戦したものや校内での取組みが優秀であったものへの「福井高校賞」授与者数について100名以上を維持する [98名]。	(1) ア：89%(○)、イ：89%(◎)、ウ：221(○) コロナ禍で校外の機会は制約され続けたが、端末も積極活用して視野を外に広げ、種々の機会に多様な社会人(例：本年新規に車イスバスケット選手)との出会いを設け、フェスタでも近隣中学校の教員に見ていただくなど、リアルなコミュニケーションや前向き思考の涵養に努めた。結果：福井高校賞も大幅増加。
「発見・実現」 確かな学力の定着	(1) 興味関心・進路希望に応じた教育内容の創造 ア、選択科目の精選と内容の充実 イ、少人数展開授業・文章読解・学び直しの内容の向上 (2) 主体的対話的な授業による学習意欲の向上 ア、授業改善の取組み イ、学習力向上のための研修の実施	(1) ア、総合学科の特徴を生かして生徒の興味関心やキャリア形成に有用な科目設定・授業展開を行い、生徒に自己実現させる。 イ、全教科で読解力の育成と学び直しの要素を取り入れた授業を行い、ドリカムや授業HRではアンガーマネジメントの内容を盛り込む。 (2) ア、観点別評価やICT活用の有用化を目的に、OJT・研修等(府教育センターの研修とも連携させた授業力向上プロジェクトを推進する)を充実させ、生徒の学習力を向上させる。 イ、教員相互の授業見学や研究授業を実施するとともに、各教員の目標に「主体的・対話的」な授業の工夫を設定し、実践を検証する。	(1) ア・イ、卒業生アンケートの「総合学科で学んでよかった」の回答：90% [90%]。 ア・イ、自己診断アンケートの「他の学校にはない特徴」の回答：80% [79%]。 (2) ア、自己診断アンケートの「授業が分かりやすい」の回答：75% [69%]。 イ、自己診断アンケートの「教え方の工夫」の回答：80% [81%]。	(1) ア：95%(○)、イ：83%(○) 規模が小さい本校では「ちいさな総合学科」を意識している。地元生徒比率が高い(1年生：近隣の茨木7中学で65%)ことと外国由縁の生徒が10%以上在籍することを強みとし、両者の相違も生かした選択授業・ドリカム授業などへの満足度が高いと考える。 (2) ア：72%(△)、イ：79%(○) イアの8%は、教員の工夫は生徒に伝わっているが、理解への到達度は下がるとも。あわせて教員からの一方通行の授業に対して満足度が低い傾向も感じられる。なお一層生徒が主体的に考え、参加する学びを工夫していく。
安全で安心な学びの場づくりの推進	(1) 人権教育と生徒指導等の充実 ア、生徒に寄り添った指導の促進 イ、学校行事や部活動の充実 ウ、多文化共生の取組み (2) 志を一つにする教職員集団 ア、全ての教職員のチームワーク向上 イ、ミドルリーダーの育成 ウ、「働き方改革」への取組み	(1) ア、職員研修や外部機関・人材との連携を深め、居場所事業を定期開催する。情報共有と細やかな支援により、生徒が「学校生活を楽しい」と感じる雰囲気を醸す。 イ、特別活動をはじめ、集団作りの観点から3年間を見通した取組を進める。部活動においては学校全体で支援体制を充実させ、加入率をあげ、かつ継続させる。 ウ、日本語指導・母語指導・進路指導の充実と多文化共生の取組を学校全体で進め、生徒全体の自負とし、学校の特徴にする。日本語指導のためのボランティアの活用や校内での「やさしい日本語」の利用等も推進する (2) ア、首席・分掌長・学年主任をコアに生徒連携委員会等、組織での対応力を強化する。 イ、運営委員の多くが20代・30代であることも踏まえ、ポストコロナを見通すとき、単にコロナ以前への復旧を追うことなく、新カリ・観点別・1人1台端末なども展開・活用する新しい教育にふさわしい学校運営体制を構築しつつミドルリーダー	(1) ア、研修・ケース会議を年間10回以上実施。居場所事業のほか、SC・SSW・CCなど専門人材との連携も強化し、自己診断アンケートの「学校に行くのが楽しい」の回答：75% [66%]。 イ、体育祭・文化祭・修学旅行を復興し、部活動の加入者を増やす。体育祭・文化祭・修学旅行について自己診断アンケート肯定的回答：80% [72%]。 ウ、多文化共生にかかる自己診断アンケートの肯定的回答：85% [81%]。あわせて人権について学ぶ機会：90% [87%]。 (2) ア、自己診断アンケートの「悩みや相談」の肯定的回答：80% [73%]。 イ、自己診断アンケートの「先生はお互いに協力」の肯定的回答80% [79%]。 ウ、教職員の超過勤務時間を、月35時間以下とし、ストレスチェック値を110未満にする [113]。	(1) ア：73%(△)、イ：78%(△)、ウ：84・87%(○) 出席状況では「コロナ疲れ」が見え、部活動については飲食・物販店等が高校生を求め、また高校生もアルバイトをせざるを得ない状況で入部率は上がらないのだが、指標は目標値には届かないが上昇した。校内外と連携しての成果。専門人材にCCが加わった効果は大きく、SSW等とも連携して学力以外の要因で進路が考えられない生徒にも対応できた。茨木市のユース事業ともコラボの居場所事業は盛況。同市ほかの子育て担当課や福祉担当課・CSWなどとの連携もSC・SSWの助力も得て深化した。研修では人権や多文化などに加え「ソフトスキル」についても実施。ソフトスキルについては生徒にも必要なこととして今後重要視する。イの3行事は実施できたが、3年間とも縮小版だった3年生に満足を求めることは酷。ウについては数値未達であるが、多文化にかかる出前授業等が校外で好評であったこと、またアンケート後の実施となった2年生の人権行事(車イスバスケット講演&体験)が講師側・生徒側ともに大好評であったことより○とした。 (2) ア：81%(○)、イ：80%(○)、ウ：121(△) 悩み相談については、専門人材とその助言や各自での学びを深めた教員、あるいはコロナ禍の感染予防対策や新規の眼科・耳鼻科検診の立ち上げの中で、相談機能も保持した保健室の努力の成果。一方、ウについては生徒の満足度と引き換えに悪化。超勤時間は減っているが、コロナ禍もあり教科外の支援的業務

府立福井高等学校

		を養成する。 ウ、一斉退庁日や部活動の休養日の趣旨を徹底し、各業務を短期のミニPTで取り組むなどして業務の平準化をすすめて生徒にも「働き方改革」の実際を見せ、将来の働き方を考えさせる。		の複雑さ深刻さが増大している。業務時間を減らす中で、支援度を向上させようとする教員を支える更なる支援が必要である。
多文化共生を生かした地域連携保幼小中高大連携の推進	<p>(1) 絆づくりと活力あるコミュニティの形成</p> <p>ア、地域に根ざした学校づくりの推進</p> <p>イ、「キャリアパスポート」を活かした中高連携の構築</p> <p>ウ、地域、中学校に向けた情報発信</p> <p>エ、多文化共生を生かした連携</p>	<p>(1)</p> <p>ア、福祉の授業や、部活のイベント参加などで積極的に地元と交流することを復活し、小中学校での出前授業も充実させる。茨木市や同人権協会・豊川教育ネット等の事業や研修・公開授業等に参加し、「福井高校を育てる会」との連携も強める。</p> <p>イ、「キャリアパスポート」等取組みについて、小中学校との連携を深め、発展的に継承する。</p> <p>ウ、学校の取組みをHP・説明会など地域・中学校に発信するとともに、「福井高カップ」をはじめ生徒主体の取組みを復活する。</p> <p>エ、日本語指導が必要な生徒のための選抜実施校であることを生かし、地元保・幼・小・中・高や大学等ともつながる多文化共生の連携を行う。あわせて、研修会・報告会等の機会をとらえて本校からの発信も強化する。</p> <p>オ、上記ア～エについて、在校生・保護者へのメール配信を行い、在校生・保護者を通じての地元連携を強化する。</p>	<p>(1)</p> <p>ア、自己診断アンケートの「地域交流」の肯定的回答を70% [61%]。</p> <p>イ、生徒が出身中学に出向いてドリカムの成果発表を行うなど、生徒による出前活動を5校以上で行う。</p> <p>ウ、中学生・同保護者向けのオープンスクール・学校説明会の年内の参加者数を20%増やす[327人うち中学生222人]。</p> <p>エ、多文化共生の地元連携(各学校等の多文化学習への協力、地域の識字・日本語教室との連携など)を5件以上行い、大学等の実習・調査・研究にも複数協力する(日本語教育に係る実習や、多文化共生に係る研究など)。</p> <p>オ、「本校HPを見る」との指標を「本校HP・メール」を見ると変え、自己診断アンケートの肯定的回答を70% [56%]</p>	<p>(1)</p> <p>ア: 75%(◎)、イ: 出前8(うち生徒参加7)校(○)、ウ: 396(うち中学生260)人(○)、エ: 12件(○)、オ: 「HPを見る」のまま56%(△)</p> <p>福祉・保育の授業で地域の福祉施設・保育所等で実習。地域中学校区の豊川フェスタ、識字・日本語教室、福井地区自治会行事(文化祭・防災会)等や茨木市人権啓発推進協議会主催事業など茨木市関連の取組みに参加。阪大学生への研究協力・追手門学院大・滋慶学園などのインターンシップ・実習に協力。近隣学校へは教員のみのほか日本語指導生徒も参加の出前授業等を実施。多文化では茨木市の「いばらき・学生等連携事業補助金」をいただき上掲の活動で小学生とともに龍舞をすることなども実施。コロナ禍継続のため、中学生向けの福井高校カップは開催できなかったが、陸上部等が個別に中学生を指導するなどとした。日本語指導の生徒に「茨木市文化振興ビジョンの策定にかかるワークショップ」の依頼もあり、本校の多文化共生にかかる認知度・貢献度は大いに向上した。HPとメールについては、メールの有効性は十分ある様子のため、再度HPのみでアンケートした。</p>